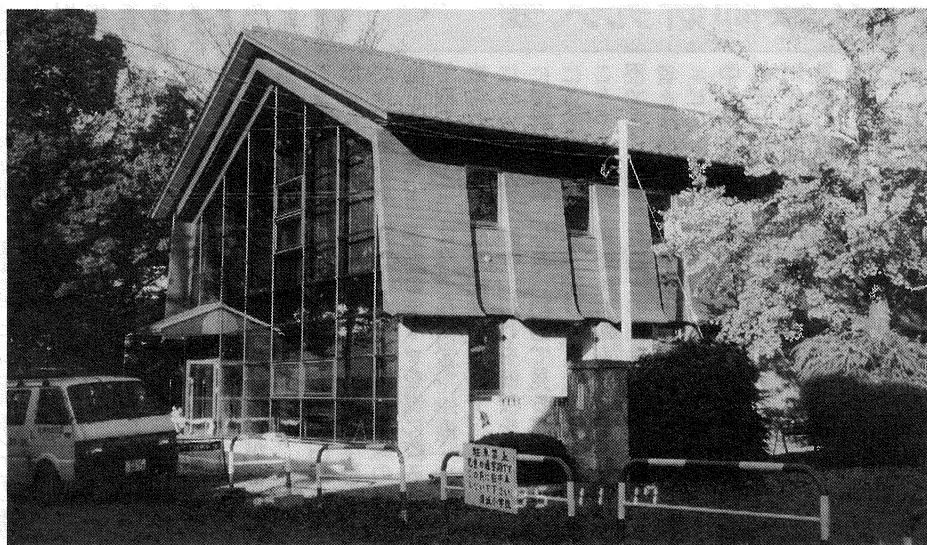


# 祝 新教育会館竣工

新装なった新教育会館



第168号

発行所 上高井教育会

発行人 上高井教育会長

竹内正勝

編集人 会報編集委員長

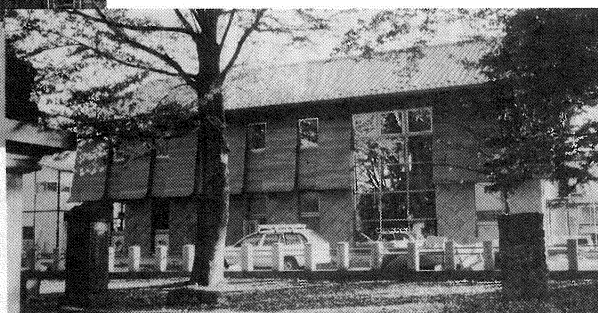
丸山剛

印刷所 須坂新聞社

鉄骨の組み立て工事



奥田神社境内から見た新教育会館



## 教育会だより

- 12・12・12・12・12・11・11・11・11・11・11
- 23・11・8・6・2・30・28・25・22・22・17
- 新教育会館竣工式 (会館 町田 徳)
- 第八回代議員会 代議員新会館内の視察
- 新会館へ引っ越し作業
- 新教育会館の受け渡し式
- 研究発表会 於須坂小学校
- 新教育会館の検査立会い
- 信濃教育会全県研究大会 (飯水)
- 資料施設委員会新会館への移転作業
- 会館建設委員会
- 教育会中間監査
- 第七回常任委員会
- ご指導を受ける
- 研究日(2) 谷川彰英先生をはじめ諸先生方
- 11・10 秋の講演会 於須坂市公民館三階ホール
- 講師 城田孝一郎先生(彫刻家)
- 演題「風景の中の造形と私」

## 竹内教育会長の話

長年の懸案であった上高井教育会館の移転新築工事が関係者各位のご努力に依りまして終了し、十二月二十三日(土)に竣工式が挙行されました。会員の先生方とともに喜びお祝い申し上げたいと思います。

県下各教育会に誇れる会館であり、上高井教育の新しい殿堂として充分活用されるよう期待したいと思います。



起工式より

## 研究会発表会 開催 女教師研究大会

本年度の研究発表会が、十二月二日(土)に須坂小学校で開催されました。三人の先生方の今までの貴重な実践を通しての発表が行われ、参会者に深い感銘を与えました。宮下先生の発表では、新卒の時の先輩の先生から受けた影響から、自分としてのテーマを持って取り組んできた蝶の観察についてわかり易い説明がされました。西原先生の発表では、国語教師として今まで取り組んできた研究について、特に授業案作成に苦労したことやその過程である指導者と出会ったエピソードを中心に話されました。染川先生は、中学校の養護教諭として生徒の心に触れ、共に考え悩みいっしょになつて涙した経験について話されました。三人の先生方の発表とも心を洗われる内容でした。



十二月七日(木)には女教師研究大会が須坂小学校で開催されました。七つの分科会に分かれて話し合われました。その要点を記しましたので御覧下さい。

## 上高井(須坂)の蝶の種類と分布

宮下 芳一

須坂は、標高約三〇〇呎の千曲川から、二、三五四呎の四阿山まで標高差二、〇〇〇呎。約五五％が山林。谷が深く縄文の時代から人が暮した自然豊かな地である。

八年前、井上小で四年生を担当し、理科で蝶の学習をしたことが発端で、趣味の写真撮影のテーマを蝶に絞ることになった。以来、宇原・米子・灰野川沿いの谷や、五味池・妙徳山辺りを機会を見つけて歩き、初めて見る蝶たちの撮影を続けてきた。中でも、継続のエネルギーとなる感動的な蝶との出会いは、五味池でアサギマダラと、県天然記念物のベニヒカゲだった。

長野県に住む蝶は一四六種類が確認されているのは、はたして上高井には何種類が確認できるのか、何年かかって調査したいと思っている。現在までに、アゲハチョウ科6種、シロチョウ科6種、シジミチョウ科10種、タテハチョウ科23種、ジャノメチョウ科8種、セセリチョウ科10種、テングチョウ科1種、マダラチョウ科1種。計六五種類が撮影でき、五種類は未撮影だが確認できているので計七十種類を確認している。

限られた範囲に住んでいる種類であることが分かっているものもある。上高井では絶対見つけられない蝶を除いて、あと高山蝶とシジミチョウの類に出会うことができれば、一〇〇種類をこえそうな手ごたえはもっている。

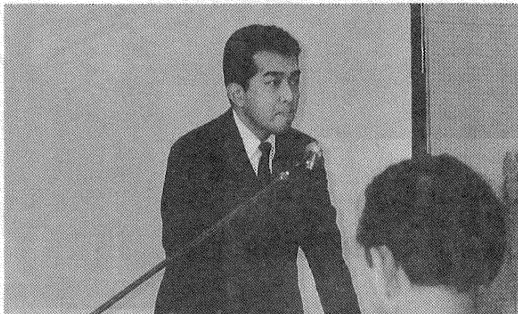
また、幼虫の食草も少しずつながら判別できるようになってきているので、野草も撮影しようかと考えている。

いずれにしても、毎年雑木林が切られ、埋められていく谷間を見るにつけて、自分にできる自然保護は何かを、減り続ける蝶をおして考えたいと思っている。(森上小)

## 出会った人々(抄)

西原 秀明

Y先生は、あっさり私の持ってきた酒を受け取ると、「ここじゃ何だから、保健室に行こう。」と言われた。研



究授業の指導のお礼が遅れたので、無礼を誤ったらすぐに帰ろうと思っていたが、そう言われてしまったので、保健室へ言った。先生は、黒板の前に、「国語」というものを、論理的なものだ。」と熱心に説明されはじめた。もし、あの時、無礼についてお叱りを受けていたら、それから以後Y先生の所に何度もお伺いするということはなかったかもしれない。

それから数年後のある日、教室を持って先生の家へ出かけた。その時、先生は病気で、かなり無理をして私に会って下さった。「語と語の関連を明確にわかるように、分析しなさい。」教材分析が観念的だ。」というようなことを指導されたことを覚えていた。

さすがに、午後になると先生は疲れた様子で横になられ、「今は治療中でちょっと辛いのだが、暇はあるから、正法眼蔵の解釈が終わりそうだよ。」

(高甫小)

### 保健室から

### 黒板の隅に描かれた男の子

染川 あゆみ

「私が教室にいないようになってみんな、私のことなんか知らない顔している。友達が一人いなくなつて同じなんだよ。だって、俺は楽しいもん。だって、私は勉強できるもん。関係ないよって知らん顔しているよ。先生達も知らん顔して授業をしているよ。私は必要とされていないのかな。」

これは今、保健室登校をしているK君の日記の抜粋です。保健室で、「教室に行きたくない。心がしんどい。」という生徒達のほとんどが周りの人の印象を「知らん顔」と表現します。そんな生徒達の話に聞いてみると悲しくなりま

とわれ、何冊もの大学ノートを見せて下さった。「私なんか、昔、膀胱炎になっただけで、何もする気が失せて、到底できませんが。」「何もしなくなつたって、痛いのは変わらなからね。」そんな話をしているうちに、昔話になった。「そういえば、初めて授業の指導をしていただいた時、『落ち着いていた』『しゃべりすぎなかった』と誉めて下さったことを覚えています。」

それをニヤニヤしながら聞いていて「あれはね、授業で誉めるべきことが全くなかったからだよ。」と言われた。

(高甫小)

思い知らされます。  
いじめ、不登校など様々な問題を抱えている私たちに、今、子ども達は「先生、どんなものにも心がないとだめだよ。心がないと悲しいよ。僕を、私を一人の人としてちゃんと受けとめてよ。認めてよ。愛してよ。」と問いかけているのでしょうか。  
ふと、保健室の黒板の隅に描かれた男の子に話しかけたくなります。

(高山中)

## 女教師研究大会

### 輝き続ける教師をめざして

下川 光子



上高井の女教師が一堂に会して研修を深める女教師研究大会は、今年で十六回目を迎えました。社会においても学校においても女性に対する期待や役割が大きくなってきていることは言うまでもなく、そのような状況の中で私たちはどのような意識をもって対応していったらいいのかを探っていたために昨年度はフリートーク形式の研修を行いました。日頃なかなか語り合えないことのできない悩みを出し合う中から、学校運営に私たちの声を反映させていこう、積極的に与えられた仕事に取り組みようと言った前向きな意見が出され、そのためには、自己研修、あるいは周囲の協力

といったことが必要ではないかという方向が見出されてきました。  
今年度は、その成果をもとに、私たちが、積極的に仕事に取り組んでいくときに何が必要なかと言うことを具体的に明らかにしていきたいと考えました。委員会では、先生方の仕事における意識、対応、実践等アンケート調査を行い、集約するとともに、大会においては、次にあるような七つの小テーマをもとに、話し合いを持ち、研修を深めたいと考えました。

①私たちと学校づくり  
②思春期の心が見えますか  
③授業、学級経営に関するミニ講座  
④さわやかな笑顔で子供と接するために  
⑤三十代の役割を考える  
⑥自分を高めるためには  
⑦保護者との連携  
この中で、第一分教会においては、四名の男性の先生方の参加を得、この女教師大会に新たな一歩を踏み出すことができました。

話し合われた内容としてはまず、学校の機能が動いていくためには、先生同士のつながりが大切な基盤だということとです。日々のゆとりのなさが子供たちに反映してしまう悩み、仕事も家庭も大切にしたいが、そのような年代には責任ある仕事が重くなってきてしまう状況。そんなときにはお互い遠慮せず、協力してほしいときには声を出そう、また分担に限らず、手を貸す気配りをし合おうという協力体制づくりの大切さが出されました。さらには、気軽に授業公開をしてくださる先生や、全校音楽も一つの研究授業として鍛えてくださった先生がいたおかげで今の自分があるということから身近なところでのオープンな研修体制の大切さも見えてきました。

二つ目として、広い視野や経験に立って考えていくことの大切さが話し合われました。女性が七〇%を占める県外の学校の様子、また海外日本人学校での経験から、外国の働く女性、あるいは女性教師の姿が話題になり、いずれも女

性だから、子供がいるから、といった甘えはなく、プロとしての自覚に立った姿があるとのこと。日常に埋没せず、視野を広げる必要性とともに、ここで県外海外の話聞いたことにありがたい思いがしました。

助言者の先生からは、学校づくりという面から、まず、自分の学校の課題は何か、そして学校目標の具現に向け、自分は何をしていくのか。クラスの子供のこころを伸ばしていくたいという視点を全校の子供に向けて考え、学校を積みましよう。という力強い

### 須高の山と川⑩

## 松川——正則の千両堤——



松川は波峰境の高山村山中を源流に、七味・五色・山田温泉郷の溪谷をつくり、雁田山左手を扇頂に松川扇状地を形成して千曲川に注ぐ、二万三千餘あまりの一級河川である。

右岸の松川扇状地上には、小布施町が発達し、人々の生き生きとした生活が営まれている。人々の暮らしには用水確保が不可欠ですが、今回はその礎となった千両堤のお話を紹介しましょう。  
松川は毎年大なり小なりの洪水を引き起こす暴れ川でした。ある時は松川から矢島の方へ、ある

極的に動かしてははい。二つ目に、女性も会合でどんな目線に、徹底的に議論することが学校の活性化につながる。三つ目に視野を広く、教員以外の人の付き合いを持つことや仕事を忘れて打ち込んで浸ったりできる時を持つことで、心の豊かさを育てていきたい。そして「その場にあつたら、その場になくはならない人間になれ」という言葉と共に女性の持つパワー、素早さ、気配り、など十分に生かしてがんばっていきましよう。という力強い

(森上小)

# 火ばら 談義



## 私と「ほほえみ」

小原 ゆり

「ほほえみ」とは、我がクラスの学級通信の名前である。持つクラスがかわっても、学級通信の名前は「ほほえみ」。これからはずっと「ほほえみ」でいきたい。私はそう思っている。

さて、何をやっても三日坊主になりがちだが、珍しいことに、この「ほほえみ」だけは、教師になった第一日目から今日に至るまで、なぜか毎日続いている。同僚の先生方やおうちの方などからも「毎日毎日、大変じゃない?」「よく書くことがあるねえ。」などと心配してもらったりしているが、この「ほほえみ」に関しては、翌日の分を書いてしまわなければ(私はいつもその日の夕方に翌日の分を書くことにしているのだが)逆に何か大事な仕事をし忘れたような落ちつかない気分になるから不思議である。教師になったら日記がわりにお便りくらいは毎日書いてみるか、と思いつつも、心の中では、「まあ、続かなくなったらいっつやめてもいいや」とい

うくらしいの軽い気持ちで始めた日々の学級通信だが、ここまで続いてくると、もうやめられない。半分、「女の意地」で書いているような日もある。

こんな、なんとなく続いてきた「ほほえみ」だが、号数を重ねるごとに、古いものがある。どの「室」になつていくような気がする。日々の生活の中の子どもの様々な姿を綴ってきた「ほほえみ」。時が経つにつれ忘れていってしまうような出来事のいろいろも、「ほほえみ」は忘れない。たまにふと開いた一ページから様々な記憶がよみがえって、ホッと温かい気持ちになれる。学校でのほほえましい子ども達の姿が、一枚の紙面を通じて、各家庭や仲間にも広がって、みんなをほほえましい気分にしてきてくれたらいい。そして時々、懐かしい「ほほえみ」が私を楽しませてくれたらいい。「ほほえみ」にそんな願いを託して、またがんばっていいこうと思う。(小山小)

## レコード

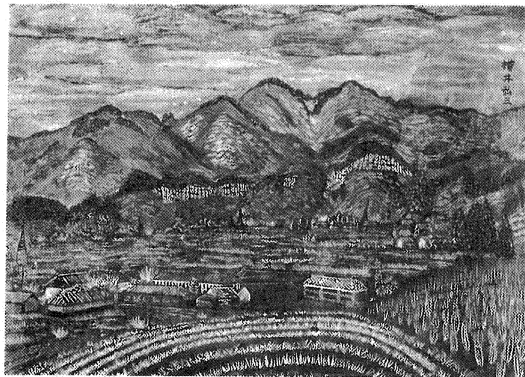
黒田 晃央

現在、皆さんの家にはレコードとそれを再生する装置があるでしょうか。私の趣味はつい数年前まではオーディオと音楽鑑賞でした。ところがここ数年で、百枚以上あったレコードは押入れの中にしまいい込まれ、大金をつぎこんで組み上げたレコードプレーヤも段ボール箱に入ったまま

## 本校の宝⑫

### 心をよせる一枚の絵 仁礼小学校

本校の玄関を入ると正面に横井弘三作、「仁礼小学校」と題する油絵が掲げられている。横井弘三は、明治二十二年飯田市に生まれ、幼少の頃



大正四年、二十六歳で二科展に出品し、橋牛賞を受賞、その後製作活動を続けられ、二科展を中心に数多く作品を発表された。

大戦末期の昭和十九年、友人の誘いをうけ長野市に疎開し教師として美術指導をされた。その後、昭和二十三年四月から一年間、県立須坂農業高校に助教諭として勤めた。実業学校は美術の時間が少なかつたので、同時に仁礼小学校・中学校でも美術を教えられた。

かなものだったように思いいます。それは正にアナログの音、デジタルのCDでは出せない味わいがあり、より人間味のある音だったと言えます。

あのレコードをターンテーブルにのせ、静かに針をおろすたまらなく繊細で幸福に満ちた瞬間。改めてなつかしく思います。今のCDでは、ボタンを押せばパッと音が出るばかり、味もそっくもありません。それに冷たい音。確かに聴きたい曲が瞬時に聞ける

「仁礼小学校」と題する作品は、授業時間の少ない日に、段々畑の上から木造校舎並ぶ村の学校の全景を描いたものだが、足もとと丘に円弧状に立てられた畑の畝は敗戦から三年経ったばかりの、まだ、食料品不足に悩んでいた時代を思わせる。松などの常緑樹の緑だけが目立つ早春の風景なので、一年間一緒に過ごした村の子供たちとの別れを前

に山村讃歌を胸中でうたいながらの力作である。

当時、直接指導を受けた地域の方は、学校へ来られた際に必ず、絵の前に足を止めて、恩師、学校生活を回顧され誇りにされておられる。地域の方々にとって、小中学生時代に戻る機会になっていると思える。そして、新たな生きる力を与えてくれる一枚の絵であるのかもしれない。大切にしたいと思っています。

(田幸文雄)

効率の良さは見事としか言いようがありません。私自身も

うかつにもその恩恵にどっぷりつかってしまっている。そしてあのゆつたりとたまたまなく繊細な至福の瞬間をどこかに置き忘れてきてしまった。このことは、よく考えてみると私自身の生活や心情の変化とも似ているような気がして

います。年をとるにつれ何やら生活する事に追われ、だんだん頭の中や心の中の「ゆとり」がなくなり、「ゆとり」そのものすら必要と感じなくなってしまうているのです。

何とも淋しい事でしょう。「何でも効率良く早く。」という時代の流れも仕方のない事なのでしょうか。

私にとってのレコードの響きは暖かくおろからで人間的な響きでした。毎日子どもたちの前に立つ自分は、どこかにあのレコードの響きを響かせていたいと思うこの頃です。

(豊洲小)

## 編集後記

今年は年始め早々から大きな事件が続きました。教育界においても様々な問題が起こって、我々教育に携わる者にとってはいっそう心を引き締めていかなくてはならないと思う今日この頃です。新しい教育会館が完成しました。この中に新しい伝統をどう吹き込んで行くか、今後の大きな課題です。よいお年をお迎え下さい。

(川上、竹内)